

盲目の詩人加藤勘助の生涯（一）

古川 敬

加藤勘助と聞いても、あまりご存じない方が多いと思います。

先日も友人に「加藤勘助の講演会をする」と言いましたら、「おう、今度は風林火山か」と言われました。それは山本勘助です。そういう私も最近までこの戦国武将のような名前の人物のことを全く知りませんでした。ふとしたことから加藤勘助という名前を知り、どんな人だろうかと興味を持ち調べ始めました。

歴史的なことを調べるのは本当におもしろくて、図書館の郷土資料のコーナーに通ったり、別府大学の図書館に通ったりしながら加藤勘助に関する断片的な資料を集めてつなぎ合わせていきます。それは、ちょうど考古学

で土器の破片を掘り出して、そのかけらをつなぎ合わせていくと美しい姿が見えてくる、あれと同じです。

ただ、なんでもそうですが、こうなだらかなカーブで物事が進むのではなくて、ある時にどかんと大きな扉が開くように一気に霧が晴れて、その全体像が見えてくる瞬間があります。

加藤勘助を調べている時もそんなことがありました。ある資料を調べていると加藤勘助の実家のことが書いてありました。そこには勘助の実家は鶴岡の星宮だと書いていました。

この時はほんとに、ひっくり返るくらい驚きました。私は鶴岡の藤原に住んでいます。星宮と言えば隣の区です。「そっういえばあの角のお宅が確か加藤さんだったなあ」と思い、お宅に連絡を取ると、そこは果たして加藤勘助の実家だったのです。

加藤勘助はご近所の人でした。そこから、おぼろげだった加藤勘助の姿がくっきりと浮かび上がってくるわけです。

加藤勘助は明治から昭和の初めを生きた詩人です。武者小路実篤や、実篤が属していた白樺派と呼ばれる有名

な文学集団の間で、詩人としてその才能が高く評価されてきました。多くの作品が白樺派系の文芸誌に発表されていることも分かりました。

そして 若いとき失明し盲目の詩人と呼ばれていたことも分かってきました。

武者小路実篤から深い信頼を受け、さらにその詩人としての才能を高く評価された加藤勤助、その波乱に富んだ人生を勤助が出合い大きな影響を受けた三人の人物を軸に辿っていきます。

第一章 生い立ち、阿南卓との出会い

勤助は明治二十四年五月一日、加藤平蔵・キタの間に三男として生まれています。生まれた場所は佐伯市船頭町で角田時計店の近くだったそうです。加藤家は加藤シャツ店という名前の仕立て屋を営んでいました。父平蔵は勤助が九歳の時なくなりますが、母キタが店を切り盛りし縫い子を何人も雇い店は繁盛していたと言います。当時の佐伯新聞にも加藤シャツ店の広告が出ています。

勤助の家は男三人兄弟で兄弟そろって学問の好きな頭

の良い子供たちだったそうです。ただ、勤助は子供のころから体が弱く、少し目も不自由だったので、母キタは勤助を心配し、人一倍かわいがったということです。

体が弱く目も弱視の傾向があった勤助は、佐伯から出て勉強をしたいという気持ちはありましたがそれは叶いませんでした。そんな満たされない日々を若き日の勤助は送っていました。

そんな時一人の男が早稲田大学を卒業して佐伯に帰ってきます。

阿南卓です。阿南卓と言えば戦中から戦後の困難な時代に佐伯市の第二代市長として市民のために尽くした人物として知られています。阿南は明治十九年生まれといえますから、勤助の五歳上で勤助の兄らいざく来作とは同年代でした。

当時佐伯に中学がなかったので阿南は臼杵中学に進学しますが、そこで先生と大喧嘩をし臼杵中学を飛び出し、延岡中学に転校します。

その延岡中学には後に歌人として名を成す若山牧水が同級生でいました。阿南と牧水は意気投合し、学内に文芸

部を作り文芸同人誌「あけほの」を発行します。

阿南と牧水は延岡中学を卒業すると早稲田大学に進学します。そこで牧水は歌人としての道を進むこととなり、阿南は故郷佐伯のためになる仕事がしたいと佐伯に帰ってきます。

阿南の家は今の三余館のあたりで勘助の家と近い所にあつたので、阿南と勘助は自然に行き来が始まつたと思われまゝ。勘助にとつて、東京の文化の香りのする阿南は幼い頃からの憧れの人であり、阿南から聞く早稲田大学の教授である坪内逍遙や新進気鋭の歌人若山牧水の話は勘助の文学への情熱を大いにかき立てたに違いありません。

こうして、勘助はおそらく阿南の勧めもあつたのでしよう「短歌」の道に進むこととなります。勘助は若山牧水に近い歌人窪田空穂が主催する文章世界に短歌を投稿し、短歌の指導を受けながら、明治四十五年佐伯で初めての短歌同人誌「うつくし」を、編集者として会員八名で発行することになります。

この毛筆で書かれた回覧誌である短歌誌の表紙は、大分中学を卒業したばかりの画家菅一郎さんが書いたそう

です。その後大正初年「うつくし」は「金盞花」と名前を新たにし、活版印刷の同人誌に形を整えます。この金盞花には後に英文学者として、また山頭火の親友として名高い工藤好美も参加しています。

一方阿南卓は帰郷後大正二年三月、郷土の発展には市民の自治意識の向上を図らなければならないとして地方新聞「佐伯自治新聞」を発行します。この佐伯自治新聞は後に「佐伯新聞」と名前を替え昭和十四年まで発行され、常に不偏不党公平中立を守り佐伯市民の良識の象徴として愛され続けました。その「佐伯新聞」に阿南は短歌誌「金盞花」出版をたたえる文を書き、若き歌人加藤勘助に大きな期待を寄せます。

勘助は阿南の期待に応え佐伯の短歌界のリーダーとして活躍するとともに、全国的な投稿誌である「文章世界」の同人としても頭角を現し始めていました。

阿南は勘助の才能を惜しみ、佐伯新聞の記者として勘助を採用し、勘助の活躍の場を与えようとしました。紙上に阿南の期待に応えるべく、勘助の意気揚々とした入社辞が載せられています。

勘助にとつて阿南との出会いは、病弱で目が不自由と

いうハンディーで悶々とした日々を送っていた勘助にとつて、まさに一条の光がさすそんな出会いでした。阿南によつて短歌という表現手段を得た勘助は新たな人生の一步を踏み出しました。

二、歌人木下利玄との出会い

二十歳の前半、佐伯新聞の記者として、また佐伯を代表する歌人として充実した日々を送っていた勘助。佐伯新聞に掲載された短歌は時々身の回りで起きた事や佐伯の自然の風景を素直に伸びやかに歌っています。

春の雨み墓の前に供えたる金紙銀紙の花ぬらしけり
おん寺に程近ければあたらしき

墓にともせる灯も見ゆる家

その家はみ寺に近し朝夕の鐘の音にも涙ぐまるる

海見ゆる峠の茶屋の坪先の畠に黄色く咲ける菜の花

畑の浦峠にて

君が住む蒲江はよろし夜となれば

潮の遠鳴りかぞへつつ寝る

潮の花とび散る磯の友ぐれを

海の歌などうたひてあるらん

ところが大正三年三月二十二日佐伯新聞に掲載された勘助二十三歳の時に作った歌はその様相が一変します。

醒めたる者の悲哀 秋郊（勘助の筆名）

よろこびに輝く瞳みはりたる

少年の春よとわにかへらず

うつくしき理想の影も消え去りし

現実の前のさびしき姿よ

目醒めてのあとの淋しさよ灰色に

わが世は遠しわが世は遠し

愛すべき己をひとと抱きしめて

醒めし悲哀にひとり泣くかも

理解泣き親兄弟のかなしさに離れてひとり生活をする

労働に疲れし友のいとしさよ

わが内省ないしやうのさびしさに似て

しばしとても物考へること為し得ざる

寂しき人等商売をする

傷つきし心の人の疲れたる瞳にいたき三月よちの陽

不平なく生きんとするにはあまりにも

社会は近く我に迫り来

人のため運動を説き学問を

強ひる人等のかなしきいさかい

道を説く賢き兄のいくたりを持ちし弟のまよへる心

この短歌の「醒めたる者の悲哀」という題名からしてちよつと尋常ではありません。ちよつと前までは新進気鋭の歌人としておおらかに歌を詠んでいた人と同じ人物とはとうてい思えません。人生に絶望し、悲しみに打ちひしがれた人の歌のようです。

どうしてこのような心境の変化があつたかずっと不思議に思っていました。

その疑問は勘助が後に書いた詩「富士を思ふ」を読んで解けてきました。その頃勘助は佐伯という地方の一歌人で一生を終えることに飽き足らない自分に気づいたので。このままではいけないという焦燥感から勘助はついに佐伯を脱出し東京へと向かいました。この上京は決して家族から祝福を得てのものではなく、いわば幕末の若者が大志を抱いて脱藩したときのようなものでした。

しかし 勘助は佐伯に帰ってくるのです。この「富士を思ふ」で「しかし私は間もなく郷里に残して来た母のことのために再び国へ帰らなければならなかつた」と書き「私は所謂孝行な若者であつた」と書いています。そして「淋しい年とつた母の顔が涙の目に浮かんだり消えたりした」と続けています。

前にも書きましたが、勘助の母は病弱な勘助のことを心配し人一倍可愛がっていました。それは終生変わりませんでした。そんな勘助の母ですから、勘助が一人で東京に向かったということを聞いてどれほど心配したか、兄たちに勘助を連れ戻すように強く言ったことは想像に難くありません。結局親孝行な勘助はそんな母親の姿を聞いてなお東京に残ることはできませんでした。

自分を愛おしんでくれた母親を泣かすことはできません。勘助は東京を去り佐伯に帰ることを決断します。

それは苦渋の決断でした。その時の心境を後に思い出しながら書いたのがこの「富士を思ふ」と題された詩でした。母親の気持ちを大事にして佐伯に帰ってきた勘助ですが、青雲の志を断念しなければならなかった無念の気持ちには計り知れませんでした。恐らく帰郷した勘助がその時の気持ちを詠んだ短歌がこの「醒めたる者の悲哀」という題名で書かれたものだろうと推測できます。

その後しばらく勘助の歌は佐伯新聞に載りません。

そして、一年後次のような歌が掲載されます。

狭き町低き家並みを眺めつつ

腕組みて居たり山上にして

其の頃は長い手紙を書きたりき此の頃書くは短い葉書

古里の淋しさなどを細々と

書き送りし頃のわが身いとしも

歌は以前のように穏やかになっっているものの、この狭い町佐伯でやはり生きていかなければならないのかという閉塞感にどこか淋しさが伺えます。

その後文章世界への投稿や「金盞花」の発行は続いていたのですが、佐伯新聞にその歌が載ることはありませんでした。

そして、大正六年六月七日付の佐伯新聞に佐伯歌壇の歌として次のような短歌が発表されます。

勘助二十六歳の時です。

佐伯歌壇

加藤勘助

世はいつか若葉明るき五月ぞと

男はひとり胸とどろかす

五月きぬ見よや若木はすこやかに

涯なき空に伸び行けるかな

五月きぬ明るき世界広き世界緑の世界こころよき世界

生長の歡喜にむせぶ草も木も明るき空も五月となれば

これまでの歌とは一変し、生きることの喜びが爆発したようなそんな歌です。

勘助の心境にどのような変化があったのでしょうか。

勘助はこの年、勘助の人生に大きな影響を与えた二人目の人物に出会うのです。

その人は歌人木下利玄です。木下利玄は石川啄木や若山牧水と並び近代を代表する歌人です。小学校から高校の教科書にその歌は紹介されています。利玄は生まれてきた長男、次男が相次いで亡くなり、そのため健康を害した妻の療養と慰めのため、大正五年から二年間大旅行を計画します。三月末勤めていた目白中学の教職を辞し、東京を出発し伊勢、奈良、京都、兵庫の城崎温泉と巡り、出雲、

津和野を経て大正五年十二月三十一日に別府に入り、翌大正六年から一年間別府に滞在します。利玄はこの大旅行の間に歌を作り続け代表的な歌が生まれました。またその時に書かれた日記が紀行文学として高く評価されています。

大正六年の正月、勘助はその別府に滞在する木下利玄と同じ宿を偶然訪れたのです。

その時の様子は木下利玄を追悼する勘助の文章に見ることができます

先生を知ったのは今から九年前の冬、私が別府に行つたとき偶然同じ宿に落ち合ったのが初めてである。勿論私はその頃はまだ眼が見えていた。私が宿に着いた晩、宿の番頭が「芳名録」と云ふ帳面を持って来て、私にも書けと云ふ。で、私は自分の書く場所を開いた、と私の場所の隣りに「木下利玄、同照子」と書かれてあつた。

私はこの名をよんで胸を跳らせたのを今でも尚記憶している。私は其の頃若かつた。そして下手な歌を作つていた。私がこの思いがけない驚きと喜びに若い心を跳らせたのも無理ではなかつたらう。それから二三日して私は

私の好意をハガキで先生に知らせた。先生は私の宿から五六丁離れた海岸の別荘の方にゐられた。私はハガキを出した夜、別荘の方から迎への男が来て、私はその人に案内されて行つた。先生も奥さんも、私の行つたことを大変喜ばれた。夜の波の音が聞える静かな明るい部屋だつた。

この文から二十六歳の勘助が木下利玄との偶然の出会いに如何に興奮していたかが分かります。歌人である勘助にとつて、木下利玄はまさしく「先生」と呼ぶに相応しい人でした。木下の短歌について勘助は次のように書いています。

先生の歌は、明治から大正にかけて日本一であらう。あの実感の深い感じ実感の確かさ、自由で独特な言葉と調子、気品の高い歌それらは他に類がないであらう。先生の歌は一首心首が完成品だと云ふ感じがする。感じが変に澄み切つてみる、先生は自然をよく歌はれた、先生は自然を通して神を見たであらう、さうしてまた神は先生にとつて芸術そのものであつたらう。それ故心本の草や木を歌つても、先生はその形や色の美しさを歌ふ

ばかりでなくその中に流れてみる生命の美しさを歌つた。

自然の景色を歌つても、その中に澁刺たる精神の感じがある。一字一字が実に煮詰つてゐて、よくこんなに短い詩形に自然の大きな感じを纏めることが出来たかと驚嘆する、それだけに歌を作る苦心も一通りではなかつたと思ふ。先生の歌をよむと、先生の静かに落着きのある人格に接するやうである。芸術に對^{むか}ふ心の持ち方の真面目さ純粹さそして辛抱強さには深い尊敬と愛とを感じない訳には行かない。

木下夫妻が滞在する別荘を度々訪ねた勘助は、そこで利玄から当時の文壇の話も聞かされていきました。利玄の話の一言一言に勘助は聞き入つたことでしょう。

利玄の別府日記には勘助の名前が度々登場します。初めて勘助の名前が出るのは大正六年一月十日「佐伯町の加藤氏へ歌稿の評」と書かれています。

利玄が別府に来てわずか十日目に、すでに勘助は利玄に自らの歌の感想を求めていることになりました。従つて勘助と利玄が出会つたのは利玄が別府に来てすぐの正月

三が日の頃だったのでしよう。とにかく勘助は利玄の宿に度々顔を出します。利玄も勘助のひたむきさに心を惹かれ、二人では別府の海岸をよく散歩した事がその日記に書かれています。

足しげく別府に通う勘助に、母はまた勘助がどこかに行ってしまうのではないかと心配し、勘助に外出を禁じたりもしました。それでも勘助は利玄に会いたくてたまらず、夜中に二階の窓から帯をたらし家をそとと抜け出して、夜行に乗って別府へ向かったことも何度かあったようです。

そのうち勘助は利玄を佐伯に誘います。大正六年五月十六日、利玄は勘助の誘いを機に南九州への旅を思い立ち別府を出発します。勘助とともに鐵路佐伯を訪れた利玄は、豊後水道の美しさに感動します。佐伯では梅屋という宿に泊まり、翌日城山に上り独歩が寄寓していた坂本家や、養賢寺の藩主の菩提所を散策します。その後、葛港から日向航路の高松丸に乗り、蒲江港を経由して海路日向灘を土々呂に向かいました。

その時に利玄が蒲江の風景を詠んだ歌が残っています。

岬めぐれば人家かたまりわが汽船

荒磯に沿ひて久しかりしが

岬かげにかたまる村へわが汽船

とまり臨みて汽笛を鳴らす

この湊昼餉どきならし海ゆ照るに

日に光てあり屋根も若葉も

かつて青雲の志を持つて東京へと向かった勘助でしたが、その夢はかなわず悶々とした日々を送り、ついにはあきらめにも似た気持ちを持つようになった勘助にとって木下利玄との偶然の出会いには衝撃的なものでした。

自分が投稿している「文章世界」のまさにトップリーダー的な存在の利玄が目の前にいる。そして自分と楽しく会話をしたり散歩をしたりしている。勘助にとって夢のような時間だったことでしょう。

この佐伯歌壇で詠まれた短歌はその喜びを爆発させたような歌でした。

これまでの閉ざされた世界から目の前に大きな世界が

広がった、勘助のそんな気持ちがこの数首の歌に表れています。利玄との出会いは勘助に再び生きていく勇氣を与えました。

そして、利玄はもう一つ勘助の人生に決定的な影響を及ぼします。それは同じ白樺派の友人武者小路実篤を勘助に紹介したことでした。

(続く)

【参考】

○若山牧水

明治大正の歌人、本名繁。明治十八年八月宮崎県東臼杵郡坪谷村(現日向市東郷)医師若山立造の子として生まれる。明治三十二年延岡中学入学、在学中に回覧雑誌、「新声」、「秀才文壇」等に短歌、俳句を投稿。三十七年早稲田大学予科入学、尾上柴舟に入門。翌年前田夕暮、正富汪洋等と車前草社を結成。在学中、北原白秋、土岐善麿等と交友、七名の学友と回覧雑誌「北斗」を出し小説を書く。牧水流と呼ばれる流麗な作に青春の哀感を歌う。旅の詩人、自然歌人として愛誦されている。

○阿南 卓

明治十九年三月、旧藩時代御家老職を勤めた齊藤家の齊藤才佐の三男として生まれる。明治二十三年親戚の阿南其二の養嗣子となる。幼少より穎敏利発であつた。延岡中学に入り文学に興味を持ち、校友会雑誌の編集委員として同窓の若山牧水等と活躍。明治三十七年早稲田大学に入学文学部哲学科に籍を置く。在学中に雑誌や新聞に文学作品を投稿した。

卒業後佐伯に帰り同人隊を結成、スポーツを通して少年の育成に努める。大正二年佐伯自治新聞を発刊する。昭和十七年佐伯市二代市長となる。

○木下利玄としはる

明治大正の歌人、明治十九年岡山県賀陽郡足守町(現岡山市)に生まれる。叔父木下利恭の養嗣子となり上京、学習院を経て東京帝国大学文科大学卒業。歌を佐佐木信綱に学び「心の花」誌上に発表。四十三年「白樺」同人となる。北原白秋、窪田空穂の影響を受ける。白樺的ヒューマニズムのあたたかみを湛たえた特異な歌風を完成する。「紅玉」「一路」等の作品を残す。